

朝鮮三国時代における 横穴式石室墳の出現と展開

東 潮

はじめに

- 1 高句麗における横穴式石室墳の出現と展開
- 2 百濟における横穴式石室墳の出現と展開

3 加耶における横穴式石室墳の出現と展開

- 4 新羅における横穴式石室墳の出現と展開
- おわりに

論文要旨

高句麗・百濟・新羅・加耶における横穴式石室墳の出現とその発展過程を時間的・地域的に通観するなかで、諸国間の政治的領域関係などの問題の一端を解明した。その基礎的作業として、朝鮮半島全域に分布する横穴式石室の型式学的編年をおこない、高句麗では平壠型石室、百濟では宋山里型・陵山里型、新羅では忠孝里型石室を設定した。そして、これらの石室が石室構造・分布関係などの把握を通じて政治的性格をもつていていることを明らかにした。

平壠型石室は、その構造・規模に規格性があり、その被葬者層に身分差・階層差を想定しえ、平壠型石室の分布地域は、高句麗の王畿と設定され、その階層は支配者層（王族・官人層）と推定した。また古墳の編年を通じて、墳丘構造・規模、葬地のあり方、謚などを加味したうえで、同一時期における石室墳を比較し、王陵の比定をおこなった。とくに長寿王を漢王墓、陽原王の陵を湖南里四神塚に比定した。

百濟においても、宋山里型・陵山里型石室の構造的特質と分布状況は百濟の政治的領域関係を示唆するとともに、支配制度である五部五方制にかかわることを論証した。

加耶における横穴式石室については、伝播・系統問題に焦点をあわせ、熊津・泗沘城時代の百濟から受容したことを推察した。そして近年の発掘成果によって、洛東江流域での横穴式石室の初現は6世紀初頭で、同地域では加耶滅亡後の6世紀後半以降に横穴式石室の発達することを明らかにした。

新羅における横穴式石室の成立は、積石木椁墳という伝統的な墓制の終焉であり、その背景に新羅の国家体制の変容がみられた。6世紀中葉の真興王以後の新羅の支配領域内で、忠孝里型のような新羅的横穴式石室墳が発達することを示唆した。統一新羅時代の王陵の石室構造は、穹窿状天井式であったことを推定した。また新羅とのかかわりのなかで、小白山脈一帯や東海岸の横穴式石室についても概観した。